

第二章 『三教搜神大全』の構成

1. 三種の「搜神」資料

『三教搜神大全』の各記事は、明代に編纂されたもので、当時における神の信仰状況を示す資料として非常に重要なものである。ただ、その記事の多くは元代に成立した『搜神広記』に基づいている。そのため、記事の書かれた時代は項目ごとに異なっている。またさらに、各記事の記載自体が、それまでに存在した史書や類書、経典などからの抜き書きとなっている。この書を総体として論ずるのは、甚だ困難であると言ってよい。

さて『三教搜神大全』の記事の数は百三十余に及ぶが、そのうち「儒氏源流」から「紫姑神」までの五十八項目については『搜神広記』をほぼ踏襲している。そのため、幾つかの記事においては、『三教搜神大全』の書かれた明代ではなく、『搜神広記』が書かれた元代の状況を記すことがむしろ主となっている。例えば閔帝については、明代の「閔聖帝君」という称号を用いるのではなく、元時の「義勇武安王」をもって記される。二郎神も、「清源妙道真君」と称される。この五十八項目に含まれる神々については、元代にすでに有力な信仰があったと想定され、その記事にも比較的古いものが残されていると考えられる。しかしこれらの神々が、明代においても盛んな信仰を有していたとは限らない。これも個々の神ごとに事情は異なる。

さらに同類の書として、明代には『搜神記大全』が編纂されている。この書においては、『三教搜神大全』と同様に『搜神広記』の記事のほとんどを踏襲しているものの、各神の項目をその性格ごとに再編集し、順序をほぼすべて入れ替えている。増加された神の記事については、『三教搜神大全』と一致する部分も見える。

本章では、このような相違が何故生じたかについて、『搜神広記』『三教搜神大全』『搜神記大全』の三種の資料を比較することによって考えてみたい。

2. 三種の資料の成立について

『搜神広記』の正式な題名は、『新編連相搜神広記』である。この書は李豊楙氏の指摘にある通り、元の秦子晋の編になるものである。しかし、この秦子晋の事跡についてはほとんどわからない。一部資料では明人とするが、これは誤りであろう。李豊楙氏は『搜神広記』について次のように記す¹⁾。

『新編連相搜神広記』前後二集は、「淮南秦子晋」の撰と題す。いま北京図書館に一本を蔵す。しかしこの撰者、秦子晋の生平については分からない。この本の刊刻や流通の状況についてもほとんど不明である。『搜神広記』の早期の版本として知られているのは、毛晋（一五九七～一六五九）の汲古閣旧蔵本である。毛晋の子の毛扆（一六四〇～一七一一）はかつて『汲古閣珍藏秘本書目』の子部類に、注を施して言う。

「凡そ三教の聖賢及び世の奉ずるところの諸神について画像を付し、おのおのその姓名や称号、郷里や封爵・諡号などについて詳細に記す。また奇書というべきである。」

汲古閣の蔵書が散佚してよりは、この珍奇なる書もまた行方がわからなくなった。その後、葉德輝及びその友人の金蓉鏡が北京の書肆においてこの本を見た時には、その巻首には毛氏の印があった。これにより、この本がまさにかつて汲古閣に旧蔵された元版の『画像搜神広記前後集』（『重刊三教搜神大全』序及び後序による）であることがわかる。

現在北京図書館に蔵される本は、これと同一の版であると思われる。鄭振鐸はこれを元版とした。しかし傅增湘は秦子晋を明代の人とする。（略）この『搜神広記』が編纂され、流通した時代については、元朝あるいはそれに近い時期であるとされる。その論拠としては、記事の中に見られる封号や諡号がすべて元時のものにとどまり、かつ元朝を一律に「聖朝」と称していることが挙げられる。

葉德輝がこの『搜神広記』を北京で発見した経緯については、『三教搜神大全』の序に詳しい。葉德輝は汲古閣旧蔵の『搜神広記』をいったん得たものの、その後これを失い、代わりにその後得た類書の『三教搜神大全』を復刻したものである。

『搜神広記』の編纂が元代であることは問題ないと思われるが、その項目の幾つかについては、宋代に遡ると見なしてもよいであろう。特に「聖祖尊号」の記事の存在は重要である。ここで扱われている保生天尊は、宋の皇室の祖先とされた神である。記事の中身であればともかく、項目名に「聖祖」を使用するのは、この書の体裁の一部が宋代に既に成立していたことを示唆するものと推察される。

『三教搜神大全』の編者については、現時点では「不明」とするより他はない。葉德輝の指摘によれば、「慧遠禅師」「鳩摩羅什禅師」など幾つかの僧侶の伝については、永楽年間の『神僧伝』から抄録したものであり、ほとんど内容が一致する。李豊楙氏は『三教搜神大全』については、次のように記す²⁾。

『三教搜神大全』七巻は、題名を『三教源流聖帝仏祖搜神大全』と称す。日本の内閣文庫に明刊本を蔵す。その巻末には、「西天竺蔵版」の文字がある。この七巻本が最も早期の版であると考えられる。
(略)

その内容は葉德輝が宣統元年（一九〇七）に復刻した郎園校刊本とほぼ同じである。この復刻本は、江陰の繆荃孫旧蔵の「明刻絵図本」に依拠したものである。(略) この他、日本の宮内庁書陵部には四知館楊麗泉の晩明刊本が蔵する。これもまた七巻本である。(略)

また葉德輝は『三教搜神大全』復刻版の後序において次のように述べる³⁾。

元の『搜神広記』については、昔これを京師の書肆において見たことがある。その版は毛氏汲古閣旧蔵本であり、毛氏の印があった。

(略) この『三教搜神大全』は明人が元版の『搜神広記』の記事を増加して翻刻したものであろう。

書中にしばしば「皇明」の年号を称することから、そのことが判明する。また多くの僧侶の伝については、永楽年間の『神僧伝』の記事を写したものであり、その部分の文章についてはほとんど変更が加えられていない。⁴⁾

すなわち『三教搜神大全』は、『搜神広記』の記事をほぼ踏襲しつつ、さらに多くの記事を追加して編纂されたものである。この書が永楽年間以降に成ったものであるのは間違いなく、恐らく明の後期であることは推察可能だが、その時期が何時なのかは具体的にはわからない。

また『搜神記大全』は、序文によれば羅懋登が編纂を行ったものと推察される。羅懋登は明の万暦年間に活躍した人士で、通俗小説『三宝太監西洋記』の著者として知られている。これについても李豊楙氏の解説がある⁵⁾。

『新刻出像増補搜神記大全』六巻は、日本内閣文庫に所蔵する金陵唐氏富春堂の刊による明刊本がある。この書は羅懋登が書いた万暦二十一年（一五九三）の序がある。

それによれば、三山富春堂の『搜神記大全』は、「不備であると思われるところを増加」したのだと言う。また「巻ごとに整理し、分類を改め、絵図を付した」とする。すなわちその前に存在した「搜神」類書を整理したものである。

張国祥が勅令を奉じて『統道蔵』を編纂した時、この『搜神記大全』を収録した。ただその題名は『搜神記』としている。この『統道蔵』本には伝のみあって図がない。『統道蔵』に収録されたのは万暦三十五年（一六〇七）である。

これによれば、『搜神記大全』はほぼ明の万暦年間の編集と推察される。さらに別に『統道蔵』に収録されたものは、序文はあるものの、羅の署名が省

かれている。また『搜神記』という題名からか、これを晋の干宝の『搜神記』と混同することもあった。

『搜神記大全』と『三教搜神大全』の関係は、直接には明らかではない。『搜神記大全』と『三教搜神大全』に幾つかの共通する記事があるのは確かであるが、それは『搜神記大全』が『三教搜神大全』から取ったとは考えにくい点もある。

このことについて考えるために、三種の資料にどの神が収録されているかについて、以下に表をもって示す。なお、この表にある番号は項目ごとに出現順に便宜的に付したものである。

『搜神広記』	番号	『三教搜神大全』	番号	『搜神記大全』	番号
儒氏源流	1	儒氏源流	1	儒氏源流	1
釈氏源流	2	釈氏源流	2	釈氏源流	2
道教源流	3	道教源流	3	道教源流	3
聖母尊号	4			(附)聖母尊号	
玉皇上帝	5	玉皇上帝	4	玉皇上帝	4
聖祖尊号	6	聖祖尊号	5	(附)聖祖尊号	
聖母尊号	7	聖母尊号	6	(附)聖母尊号	
東華帝君	8	東華帝君	7	東華帝君	6
西王母	9	西靈王母	8	西王母	7
后土皇地祇	10	后土皇地祇	9	后土皇地祇	5
玄天上帝	11	玄天上帝	10	玄天上帝	23
梓潼帝君	12	梓潼帝君	11	梓潼帝君	25
三元大帝	13	三元大帝	12	上元・中元・下元大帝	8, 9, 10
東嶽	14	東嶽	13	東嶽	11
至聖炳靈王	15	至聖炳靈王	14	至聖炳靈王	32
佑聖真君	16	佑聖真君	15	佑聖真君	33
南嶽	17	南嶽	16	南嶽	12
西嶽	18	西嶽	17	西嶽	13
北嶽	19	北嶽	18	北嶽	14
中嶽	20	中嶽	19	中嶽	15

四澆	21	四澆	20	四澆神	16
泗州大聖	22	泗州大聖	21	泗州大聖	54
五聖始末	23	五聖始末	22	五聖始末	31
万迴虢国公	24	万迴虢国公	23	万迴虢国公	79
許真君	25	許真君	24	許真君	27
宝誌禪師	26	宝誌禪師	25	宝誌禪師	51
盧六祖	27	盧六祖	26	盧六祖	52
三茅真君	28	三茅真君	27	三茅真君	29
薩真人	29	薩真人	28	薩真人	39
袁千里	30	袁千里	29	袁千里	35
傅大士	31	傅大士	30	傅大士	55
崔府君	32	崔府君	31	崔府君	85
普庵禪師	33	普庵禪師	32	普庵禪師	53
吳客三真君	34	吳客三真君	33	吳客三真君	26
昭靈侯	35	昭靈侯	34	昭靈侯	107
義勇武安王	36	義勇武安王	35	義勇武安王	74
清源妙道真君	37	清源妙道真君	36	灌口二郎神	56
威惠顯聖王	38	威惠顯聖王	37	威惠顯聖王	77
祠山張大帝	39	祠山張大帝	38	祠山張大帝	30
掠刷使	40	掠刷使	39	掠刷使	144
松江遊奕神	41	松江遊奕神	40	松江遊奕神	60
常州武烈帝	42	常州武烈帝	41	常州武烈帝	71
揚州五司徒	43	揚州五司徒	42	揚州五司徒	72
蔣莊武帝	44	蔣莊武帝	43	蔣莊武帝	70
蠶女	45	蠶女	44	蠶女	128
威濟李侯	46	威濟李侯	45	威濟李侯	83
趙元帥	47	趙元帥	46	趙元帥	80
杭州蔣相公	48	杭州蔣相公	47	杭州蔣相公	87
增福相公	49	增福相公	48	增福相公	145
嵩里相公	50	嵩里相公	49	嵩里相公	88
靈渢侯	51	靈渢侯	50	靈渢侯	84
鍾馗	52	鍾馗	51	鍾馗	149

神荼鬱壘	53	神荼鬱壘	52	神荼鬱壘	148
五瘟使者	54	五瘟使者	53	五瘟使者	142
司命竈神	55	司命竈神	54	司命竈神	150
福神	56	福神	55	福祿財門	146
五盜將軍	57	五盜將軍	56	五盜將軍	143
紫姑神	58	紫姑神	57	廁神	151
		五方之神	58	五方之神	17
		南華莊生	59		
		觀音菩薩	60	南無觀世音菩薩	44
		王元帥	61		
		謝天君	62		
		大奶夫人	63	順懿夫人	136
		天妃娘娘	64	天妃	127
		混炁龐元帥	65		
		李元帥	66		
		劉天君	67		
		王高二元帥	68		
		田華畢元帥	69		
		田呂元帥	70		
		党元帥	71		
		石元帥	72		
		副応元帥	73		
		槃瓠	74	槃瓠	126
		楊元帥	75		
		高元帥	76		
		靈官馬元帥	77		
		孚祐温元帥	78		
		朱元帥	79		
		張元帥	80		
		辛興苟元帥	81		
		鉄元帥	82		
		太歳殷元帥	83		

	斬鬼張真君	84		
	康元帥	85		
	風火院田元帥	86		
	孟元帥	87		
	慧遠禪師	88		
	鳩摩羅什禪師	89		
	仏陀耶舍禪師	90		
	曇無竭禪師	91		
	仏駄跋陀羅禪師	92		
	杯渡禪師	93		
	宝公禪師	94		
	智瓌禪師	95		
	大志禪師	96		
	玄奘禪師	97		
	元珪禪師	98		
	通玄禪師	99		
	一行禪師	100		
	無畏禪師	101		
	金剛智禪師	102		
	鑑源禪師	103		
	嬾殘禪師	104		
	西域僧禪師	105		
	本淨禪師	106		
	地藏王菩薩	107	地藏王菩薩	46
	知玄禪師	108		
	青衣神	109	青衣神	129
	九鯉湖仙	110	九鯉湖仙	65
	張天師	111	張天師	28
	王侍辰	112	王侍辰	34
	盧山匡阜先生	113	盧山匡阜先生	67
	黃仙師	114	黃仙師	95
	北極驅邪院	115	北極驅邪院左判官	24

		那叱太子	116		
		五雷神	117	雷神	21
		雷母神	118	電神	22
		風伯神	119	(附) 風伯	
		雨師神	120	(附) 雨師	
		海神	121	海神	66
		湖神	122	(附) 湖神	
		水神	123	(附) 水神	
		波神	124	(附) 波神	
		洋子江三水府	125	洋子江三水府	59
		蕭公爺爺	126	蕭公	57
		晏公爺爺	127	晏公	58
		開路神君	128	開路神	152
		法術呼律令	129	(附) 律令	
		門神二將軍	130	門神	147
		天王	131	天王	45
				太乙	18
				(宗三舎人)	
				(楊四將軍)	
				肩吾	19
				燭陰	20
				張果老	36
				西嶽真人	37
				太素真人	38
				寿春真人	40
				負局先生	41
				律呂神	42
				劉師	43
				金剛	47
				十大明王	48
				十地閻君	49
				十八尊阿羅漢	50

			洞庭君	61
			湘君	62
			巢湖太姥	63
			宮亭湖神	64
			蘇嶺山神	67
			新羅山神	68
			射木山神	69
			西楚霸王	73
			零陵王	75
			惠應王	76
			金山大王	78
			彭元帥	81
			潤濟侯	82
			陸大夫	86
			祖將軍	89
			花卿	90
			華山之神	91
			聶家香火	92
			広平呂神翁	93
			黃陵神	94
			江東靈籤	96
			協濟公	97
			靈義侯	98
			張昭烈	99
			張七相公	100
			耿七公	101
			孫將軍	102
			張將軍	103
			順濟王	104
			横浦龍君	105
			道州五龍神	106
			仰山龍神	108

			黄石公	109
			石神	110
			楚雄神石	111
			石亀	112
			鐘神	113
			馬神	114
			青蛇神	115
			金馬碧雞	116
			金精	117
			火精	118
			陳宝	119
			黒水將軍	120
			木居士	121
			磨嗟神	122
			黄魔神	123
			向王	124
			竹王	125
			白水素女	130
			馬大仙	131
			聖母	132
			温孝通	133
			孝烈將軍	134
			靈沢夫人	135
			寨将夫人	137
			誠敬夫人	138
			姚娘	139
			曹娥	140
			二孝女	141
			翁仲二神	153

現在、『搜神広記』については、王秋桂・李豊楸両氏の編になる台湾学生書局発行の『中国民間信仰資料彙編』と上海古籍出版社の『絵図三教源流搜

神大全(外二種)』にそれぞれ収録されており、その影印を見ることができる。

また『三教搜神大全』については、『中国民間信仰資料彙編』に内閣文庫所蔵の明刊本の影印が収録され、『絵図三教源流搜神大全(外二種)』には清末の復刻版を収録する。『搜神記大全』については、『中国民間信仰資料彙編』には同じく内閣文庫所蔵の明刊本を収録し、『絵図三教源流搜神大全(外二種)』には『続道蔵』に収録される版を収録する。いずれにしても『中国民間信仰資料彙編』の方が版本としては優れる。

3. 三種の資料の影響関係

ここでは、三種の資料の各項目における差異と相互の影響について考察してみたい。

まず『三教搜神大全』も『搜神記大全』も、「儒氏源流」から「紫姑神」までの項目は、ほぼ『搜神広記』を踏襲している。ただ『搜神広記』においては、「道教源流」直後の「聖母尊号」の項目は独立しているのに対し、『三教搜神大全』『搜神記大全』ではそうになっていない。また『三教搜神大全』が、『搜神広記』の項目の順序までをほぼ踏襲し、「儒氏源流」から「紫姑神」までがほぼ一致しているのに対し、『搜神記大全』の方は順序をかなり入れ替えている。

しかし『搜神広記』の項目の構成をほとんど忠実に踏襲している『三教搜神大全』にも、一つだけ明らかに異なる部分が存在する。それは「聖母尊号」の記事である。

「聖母尊号」という記事は、『搜神広記』では「道教源流」の直後と、「聖祖尊号」の後と、二箇所が存在している。『三教搜神大全』では、その二項目を一箇所にまとめて、「聖祖尊号」の後に置いている。そのため、『搜神広記』における記事の数は「儒氏源流」から「紫姑神」まで五十八項目あるのに対し、『三教搜神大全』の同じ箇所では、一つ減じて五十七項目となっている。

ところが、この処理には大きな問題があると言わねばならない。実は「聖母尊号」の記事の内容は、次のようなものである。

・「聖母尊号」

唐の則天武後の光宅二年（六八五）九月甲寅に、聖母に追尊して「先天太后」とする。その祖殿は亳州の太清宮がこれである。⁶⁾

『国朝会要』に言う。天禧元年（一〇一七）三月六日に、聖祖の母に「元天大聖后」との尊号を奉る。これに先んじて大中祥符五年（一〇一二）に聖母に侯を号し、兗州の太極觀が落成のおりには、王旦などに命じ、詔を奉って封冊の礼を行った。⁷⁾

明らかに、この二つは本来別の事柄を述べたものである。そもそも前者は唐代の話であり、後者は北宋でのことである。前者の「先天太后」については、『旧唐書』に次のような記載がある⁸⁾。

（開元二九年・七四一）三月壬子、（玄宗は）玄元宮に拝謁された。聖祖の母益寿氏に「先天太后」との号を与えられた。⁹⁾

また「元天大聖后」については、『宋史』に記載がある¹⁰⁾。

（大中祥符五年・一〇一二）閏十月、九天司命保生天尊を号して、「聖祖上靈高道九天司命保生天尊大帝」とする。また聖祖の母を号して「元天大聖后」とする。¹¹⁾

すなわち、「先天太后」とは、唐代に「聖祖」とされた太上老君の聖母のことであり、「元天大聖后」とは、宋代に「聖祖」とされた保生天尊の聖母を指す。同じく「聖母」という称号を有するものの、実際には全く異なる神格である。

先天太后に関して、「祖殿」とされた亳州の太清宮は、現在、河南省鹿邑県にある太清宮のことである。太清宮の後殿は先天太后を祀り、洞霄宮と称す。殿前にある宋の真宗が建立した「先天太后賛」の碑文が有名である。

『搜神広記』においては、「道教源流」の項目で太上老君の事跡を述べた後に、その母たる「先天太后」の封号を掲げる。そして「聖祖尊号」で保生天尊の封号を記した後、「元天大聖后」の封号を掲げる。これは、紛らわしいところがあるとはいえ、記述としては首尾一貫していて問題はない。

しかるに『三教搜神大全』においては、別神である両者をただ「聖母尊号」という項目名から単純に結びつけ、これを合わせて「聖祖尊号」の後に置いている。これはその内容を全く理解しない上での改変であり、誤った処理と言わねばならない。このような改変をあえて行ったところに、『三教搜神大全』の編集者の教養レベルが露呈していると言えるかもしれない。

一方で『搜神記大全』の方は、『搜神広記』と同様にこの項目を二箇所配置し、特にこれを改変することはしていない。ただ、文中の「光宅二年」を誤って「光宅三年」とする。これについては、かえって『搜神広記』と『三教搜神大全』の間で「光宅二年」としており一致する。ちなみに、『続道蔵』本でもここを「光宅三年」としており、『続道蔵』本は富春堂本に基づいている可能性が高い。

さてこのような「聖母尊号」の記載から、『搜神記大全』の編者が『三教搜神大全』を参照したのではないことは、確実であると考えられる。何故なら『三教搜神大全』のような形に改変された「聖母尊号」の記事について、再びこれを分離して、より原形に近い記載に戻すことは不可能だからである。これより、『搜神記大全』は『搜神広記』か、或いはそれを引き継いだ「搜神」類書の記載をそのまま襲っていることが看取される。

それではその逆、『三教搜神大全』が『搜神記大全』を参照した可能性についてはどうであろうか。幾つかの記載からは、その可能性も低いことが分かる。

例えば二郎神について、『搜神記大全』はこれを「灌口二郎神」という項目名で収録する。しかし、『搜神広記』『三教搜神大全』では共に「清源妙道真君」とする。これも、『三教搜神大全』の側が、後に原形に近い形に戻したと考えるのは無理である。

では『搜神広記』に見えず、『三教搜神大全』と『搜神記大全』の両者に

おいてのみ、共通する記事が幾つか存在することについてはどうかというと、これはむしろ、相互における影響を想定した方がよい。しかしこれも例えば、「雷神」「風伯」「雨師」などの項目では一致する文章が多いものの、「天妃」の項目などは『三教搜神大全』の方の文章量が圧倒的に多く、その内容もかなり異なっている。

このような事情を勘案すると、『三教搜神大全』と『搜神記大全』の間には、直接の関係は無く、むしろ『搜神広記』の後に、これとは別に編纂された「搜神」類書が存在したと想定する方がよい。『三教搜神大全』と『搜神記大全』とは、おそらくその「搜神」類書に基づいて、それぞれ勝手に改変を行ったものであろう。

このことについては、李猷璋氏がすでに詳しい考察を加えている。なおこの考察中において、李氏は『搜神記大全』を『増補搜神記』、『三教搜神大全』を『三教搜神』とそれぞれ称している¹²⁾。

第一に問題なのは、『増補搜神記』と『三教搜神』における記事の異同と、相互の間にどんな関係が認められるか、のことである。それについて、双方に共通する神々をみると、神の名称は前者に西王母とあるのが、後者に西王靈母、四瀆神が四瀆、灌口二郎神が清源妙道真君、廁神が紫姑神、または順懿夫人が大奶夫人となっているものもあるが、どちらかと言えば、同じものが多い。しかし記事の内容になるとまちまちで、例えば、釈氏源流の東華帝君や南嶽・西嶽・北嶽・中嶽・四瀆神、及び地藏王菩薩などは完全に一致するけれども、儒氏源流では終の方の「高皇帝過魯、以大牢祀孔子。有詩賛曰…」、道教源流では同じく「宋仁宗御讚…」、玉皇上帝では最後の「格聯…」が、また后土皇地祇では「真宗皇帝封曰…」云々の、『増補搜神記』にない文句が、『三教搜神』に載せられてある。(略)

要するに、記事が違っているのは総体的に言って、『増補搜神記』よりも『三教搜神』の方が細かくなっているのが多いので、これだけで考えると両者の関係は自明のように見られる。しかし、全書の

うちの幾らかの記事の繁簡だけをもって、直ちに両書の全体的関係とすべきでないばかりでなく、『増補搜神記』の記事が逆に『三教搜神』のより複雑なものもあり、そう俄かに断定はできない。(略) さすれば一方において、『三教搜神』に『増補搜神記』を潤色・補足したとすべき記事が載せられ、他方では、却って後者が前者を敷衍したらしい、やや細かく、または年代の降る記事が見えるのでは、それは両書の相互間に縦の関係がなくて、むしろこれ以前にできていた共通の種本が存在したことを予想せしめるものである。種本が果たして元板の『搜神広記』というものであるかどうかは断定しかねるが、そうでなくても、搜神関係の類書に違いないことは、いま考察して来た書物の内容からも推知せられよう。そのような類書の系統をひきつぎながら、別々に増刷したのが『増補搜神記大全』と『三教源流搜神大全』であろうと思われる。

李猷璋氏は元版の『搜神広記』を見ていなかったようで、この考察には若干の問題もあるが、概ね首肯できるものである。

なお、いま『搜神広記』の内容を見るに、李氏の指摘する「儒氏源流」「道教源流」などの項目は、『搜神記大全』においては『搜神広記』をそのまま踏襲しており、『三教搜神大全』の方では、かなり記事を増補していることが分かる。つまりその相違は、『三教搜神大全』『搜神記大全』両者の編集態度の違いによるものである。恐らく『三教搜神大全』と『搜神記大全』については、李氏の指摘するように直接の影響関係は無く、『搜神広記』のさらに後に編纂された別の「搜神」類書があり、それに基づいて各々編集が行われたと考えるのが妥当であろう。

さて、さらに『三教搜神大全』の項目名で問題だと思われるのが、「北極驅邪院」である。この項目は、『三教搜神大全』では「北極驅邪院」という名になっているが、実際にはこの項目は、驅邪院それ自体ではなく、その左判官である顔真卿について述べただけの記事である¹³⁾。

(北極馭邪院) 左判官は唐の顔真卿である。(略) (真卿の死後) 顔家の子孫が真卿の書を得て驚いて言う。

「これはわが先の太師の親筆である。」

そこで塚を掘り、棺を開けてみたところ、中は空であった。後に白玉蟾が言った。「顔真卿どのは北極馭邪院の左判官になられたのである。」¹⁴⁾

これについて、『搜神記大全』の方は、その項目名自体を正確に「北極馭邪院左判官」としている。完全に『三教搜神大全』の編者の認識が誤っており、『搜神記大全』の編者の態度が妥当なものである。そもそも、北極馭邪院を司る神格であれば、北極紫微大帝や玄天上帝などの、もっと高位の神が想定されるはずである。恐らく『三教搜神大全』の編者は、時として記事の内容を理解しないまま、かなり恣意的に各項目の編集作業を行ってしまったものと思われる。

しかし一方で、『三教搜神大全』の編者には、なるべく民間信仰で使用されている呼称をそのまま使おうとする傾向がみられる。例えば、『搜神記大全』の方が「天妃」「蕭公」「晏公」といった形で項目名を記すのに対し、『三教搜神大全』の方は、より一般的な呼称、すなわち「天妃娘娘」「蕭公爺爺」「晏公爺爺」を用いる。これに関しては、『搜神記大全』の編者は通俗的な名称をむしろ意図的に避けようとしているのではないかと推察される。

これらの点からも、『三教搜神大全』と『搜神記大全』とでは、その編集に対する姿勢がかなり異なっており、またお互いに影響を与えている可能性が少ないことが看取できよう。

以下では、『三教搜神大全』と『搜神記大全』のそれぞれの増補の特色について考察してみたい。

4. 『三教搜神大全』増補の項目群

『三教搜神大全』においては、「聖母尊号」を除いたほぼ『搜神広記』の全項目が、そのまま踏襲されていることについてはすでに述べた。ここでは

『三教搜神大全』に特有である項目について考えたい。

まず、もっとも特徴的なのは、「王元帥」から「孟元帥」までの元帥神に関わる項目群であろう。次に「慧遠禪師」「鳩摩羅什禪師」から「本浄禪師」「知玄禪師」などに至る一連の禪師たちに関わる項目群である。葉徳輝の指摘によれば、この項目群は永楽年間の『神僧伝』から引用されたものである。ただこの他にも幾つか、「那叱太子（哪吒太子）」など、『三教搜神大全』にしか見られない項目が存在する。

まず、禪師たちに関わる項目群について考えてみたい。

この項目群は『搜神記大全』には存在しない。おそらく、『三教搜神大全』の編者が独自の判断で加えたものであろう。しかしこれらの項目群が追加された理由については不明であるとするしかない。むろん、編者はその必要性を考慮していたと考える。憶測するに、『三教搜神大全』はその書名に「三教」を謳うものの、収録される神々は道教系或いは民間信仰系のものが圧倒的に多い。この欠を補うために、編者は他の仏書から禪師の項目をそのまま取り入れたのではないだろうか。

もっとも『三教搜神大全』では、そもそも儒教系の神の項目が「儒氏源流」のみしか存在しない。この点からしてすでに、「三教」の題目が所詮名目的なものに過ぎないことが露呈してしまっているが、これについては、儒教の聖人は当時孔子を除いてはほとんど信仰の対象となっていなかったという状況を勘案すべきであろう。ましてや、民間信仰系の神がかなり主要な部分を占める『三教搜神大全』では、儒教の聖人が入る余地は少ないし、またおそらく編者の側も、その必要性を認めなかったのであろう。もっともこれはこれで、別の意味で儒教と民間信仰との間の「意識」の乖離を示唆するものである。

ところで、そもそも『搜神記』において仏教系の神仏の項目が立てられているものは、僅かに「釈氏源流」「泗州大聖」「宝誌禪師」「盧六祖」「傅大士」「普庵禪師」がある程度にすぎない。これは確かに、当時の信仰状況から考えてもバランスを欠くものであると考えられる。『三教搜神大全』『搜神記大全』が共に基づいたと考えられる「搜神」類書は、これに「観音菩薩」「地

蔵菩薩」「天王」などの項目を加えているが、それにしても仏教関連の神仏伝の少なさは際だっている。そのため、この欠を補うために『三教搜神大全』の編者は、『神僧伝』から禪師たちの伝記を追加したものであろう。

ところで『三教搜神大全』において、『神僧伝』から引用されたと思われる項目は、「慧遠」「鳩摩羅什」「仏陀耶舎」「曇無竭」「仏駄跋陀羅」「杯渡」「宝公」「智瓌」「大志」「玄奘」「元珪」「通玄」「一行」「無畏」「金剛智」「鑑源」「嬾残」「西域僧」「本浄」「知玄」の各禪師の伝記である。いまこれを『神僧伝』と比べると、その巻二から巻七までの範囲からピックアップされていることがわかる。各禪師の伝の本文はかなり一致する¹⁵⁾。

しかし、『三教搜神大全』の編者が、いかなる基準でこれらの禪師を選び出したのか、いまひとつ判然としない。

例えば『神僧伝』の巻二を見るに、そこに含まれるのは「道安」「曇猷」「曇翼」「曇始」「法頭」「法曠」「慧遠」「鳩摩羅什」「法安」「曇邕」「僧朗」「仏陀耶舎」「曇無竭」「仏駄跋陀羅」「曇邃」「宝通」「慧紹」「悟詮」の各禪師の伝である。ここから、『三教搜神大全』は「慧遠」「鳩摩羅什」「仏陀耶舎」「曇無竭」「仏駄跋陀羅」のみをピックアップしている。しかし、慧遠や鳩摩羅什を選ぶのは当然としても、道安や法頭などの他の著名な僧侶の伝をことさらに省いた理由は不明である。ところで、「宝誌」の項目においては、『搜神広記』にもともと存在していたためか、『三教搜神大全』は、そこだけは『搜神広記』の文章を踏襲し、『神僧伝』の「宝誌」の伝とは内容が異なるものとなっている。

いずれにせよ、これらの部分においては、単に『神僧伝』からの引用というだけで、独自性に乏しい部分である。また『三教搜神大全』の性格からしても、そぐわない面がある。例えば、やはり神仏の伝を集めた明の『仙仏奇蹤』のような性格の書物であれば、こういった禪師の伝があるのは不自然ではないと思われる。

その『仙仏奇蹤』は明の洪応明の撰になるものであり、袁了凡が序を付している¹⁶⁾。この書は大きく二部に分かれる。前半に採録されているのは「老君」や「東王公」「西王母」に始まり、「白玉蟾」や「魏伯陽」に至る仙人た

ちの伝であり、後半は「釈迦牟尼仏」「摩訶迦葉尊者」から「慧遠禪師」「仏図澄」などに至る仏や僧侶たちの伝である。その内容から、『四庫全書総目提要』ではこの書を小説家類に類別する。但しいまこの書の構成を見るに、『三教搜神大全』のような雑多な寄せ集めといった印象はなく、非常に首尾一貫した姿勢が感じられる。またそのためか逆に民間信仰において有力な神はほとんど収録されていない。

むろん『仙仏奇蹤』と『三教搜神大全』の双方に共通して収録される神仏も若干存在するが、両書の記事の性格はかなり異なる。ただ『仙仏奇蹤』と比べた場合、『三教搜神大全』に収録される禪師の伝の配列は、明らかにかなり恣意的と言えよう。この項目群に関して言えば、独自の資料としての価値も少なく、着目すべき点はあまりないと思われる。この項目の不統一さは、『三教搜神大全』の雑多な性格の一端を示すものであるとは言えよう。

次に元帥神に関わる項目群を見てみたい。

元帥神は、元明代の民間信仰においてかなり特異な地位を占める神である。唐以前の民間信仰や道教において、これらの神はほとんど現れない。その多くは武神であるが、おそらく仏教の密教神の影響を受けて成立したものであると考えられる。また元帥神は、宋以降に盛んになった雷法と密接な関連を有している。元帥神は、時に元帥という呼称でなく、「何々天君」と称することも多い¹⁷⁾。

元帥の中には、現在の道教や民間信仰においても盛んに祭祀されているものも多い。例えば、関元帥は後に「関聖帝君」となり、清代以降その信仰は他に並ぶものがないほどの発展を見せる。趙元帥は、趙玄壇の名称で広く財神として祀られる。王元帥は、王靈官として道観に必ずと言ってよいほど神像が置かれる神である。温元帥も、泰山の神として著名である。しかし一方で、元帥神には、清代以降ではその信仰が衰えたものも多い。例えば、馬元帥は元明代にはおそらく関帝に比肩するほどの信仰を有していたが、その後何故か信仰が衰え、現在では広東一帯を除いてはこれを祀った廟宇は少なくなっている。

元帥神は現代の道教儀礼や、また儺戯の中においても重要な地位を占めて

おり、儀礼面に関しては、その影響は現在でも大きい¹⁸⁾。

『三教搜神大全』においては、元帥神に関わるものとして、「義勇武安王」「趙元帥」「王元帥」「謝天君」「混炁龐元帥」「李元帥」「劉天君」「王高二元帥」「田華畢元帥」「田呂元帥」「党元帥」「石元帥」「副応元帥」「楊元帥」「高元帥」「靈官馬元帥」「孚祐温元帥」「朱元帥」「張元帥」「辛興苟元帥」「鉄元帥」「太歳殷元帥」「斬鬼張真君」「康元帥」「風火院田元帥」「孟元帥」などの項目がある。このうち「義勇武安王」と「趙元帥」については、『搜神広記』にも見えている。その他の項目については、『搜神広記』にも『搜神記大全』にも記載がなく、ここは『三教搜神大全』独自の記事となっている。ただ、『搜神記大全』には「彭元帥」という項目が見えるが、これが所謂元帥神に属するものかは、いささか判断しにくい。

これらの元帥神については、道教側の資料では『道法会元』に多くの記載が見えるものの、その由来に関しては不明な部分が多い。『集説詮真』にしても、『中国民間諸神』にしても、元帥神については、すべてこの『三教搜神大全』の記事を典拠としているのである。そういった意味では、これら元帥神に関する記述は、重要なものと言える。

しかし一方で問題も多い。ここに挙げられている元帥神の記事をどのような基準でピックアップしているのか、その姿勢が明確でない。

例えば、雷部の神であれば、まず鄧天君が必ずと言ってよいほど筆頭に挙げられ、これと辛天君を併置するのが常であるが、『三教搜神大全』には鄧天君の伝が見られず、ただ「辛元帥」の記事があるのみである。同様に一般的に「謝・白元帥」と併称される二元帥については、「謝天君」の伝しかない。つまり主要な元帥神の幾つかは、『三教搜神大全』には全く収録されていないのである。おそらく『三教搜神大全』は、元帥神についても、『神僧伝』の場合と同様に別種の資料からこの部分を引用したと考えられる。しかし、その項目の選択においては、またもこれをかなり恣意的に行った可能性が高いのである。

そもそも『三教搜神大全』には不思議なことに、当時民間で信仰のあった多くの神々の伝が見えない。典型的な例は八仙である。『三教搜神大全』編

纂時においては、八仙の人員がまだ固定していなかった可能性は高いが、それにしても道教でも民間信仰でも、当時最も著名であった仙人といえば八仙であったはずである¹⁹⁾。実際、先に見た『仙仏奇蹤』には、八仙の伝がほぼ収録されている。『搜神記大全』にも八仙の伝はほとんど見えないが、「張果老」だけは何故か項目が立てられている。しかし他の八仙、例えば呂洞賓も鍾離権も韓湘子も何仙姑も、その伝は『搜神広記』『三教搜神大全』『搜神記大全』いずれにも収録されていない。これについてはやや奇異な感も覚え、またその原因も不明である。ただひとつ考えられるのは、全真教系の神仙については、あまりこれを重視しなかったかものかとも疑われる。

これも『三教搜神大全』の雑多で恣意的な性格を示すものと言えよう。しかし一方で、この元帥神に関する一連の項目は、他書にはほとんど見えないもので、非常に重要な記録であることは間違いない。

5. 『搜神記大全』の項目群の編成

先にも見たとおり、『搜神記大全』は、おそらく明の万暦年間ごろに編集されたものだと考えられる。『搜神記大全』が『搜神広記』『三教搜神大全』と著しく異なる点は、その項目の配列にある。『三教搜神大全』が『搜神広記』の配列をほぼそのまま踏襲するのに対し、『搜神記大全』ではこれを大幅に入れ替えて編集を行っている。

その編集方針については、各神格の性格に注意した、かなり周到なものとなっている。この点では雑多な性格を持つ『三教搜神大全』とは異なっているといえよう。

以下に、巻ごとの構成について記す。

卷一

「儒氏源流」「釈氏源流」「道教源流（附聖母）」「玉皇上帝（附聖祖尊号・聖母尊号）」「后土皇地祇」「東華帝君」「西王母」「上元一品大帝」「中元二品大帝」「下元三品大帝」「東嶽」「南嶽」「西嶽」「北嶽」「中嶽」「四瀆神」「五方之神」「太乙」「肩吾」「燭陰」「雷神」「電

神（附風伯・雨師）」

卷二

「玄天上帝」「北極馭邪院左判官」「梓潼帝君」「吳客三真君」「許真君」
「張天師」「三茅真君」「祠山張大帝」「五聖始末」「至聖炳靈王」「佑
聖真君」「王侍辰」「袁千里」「張果老」「西嶽真人」「太素真人」「薩
真人」「寿春真人」「負局先生」「律呂神」「劉師」

卷三

「南無觀世音菩薩」「天王」「地藏王菩薩」「金剛」「十大明王」「十地
閻君」「十八尊阿羅漢」「宝誌禪師」「盧六祖」「普庵禪師」「泗州大聖」
「傅大士」
「灌口二郎神」「蕭公」「晏公」（「宗三舍人」「楊四將軍）」「洋子江三
水府」「沿江遊奕神」「洞庭君」「湘君」「巢湖太姥」「宮亭湖神」「九
鯉湖仙」「海神」「蘇嶺山神」「廬山匡阜先生」「新羅山神」「射木山神」

卷四

「蔣莊武帝」「常州武烈帝」「揚州五司徒」「西楚霸王」「義勇武安王」
「零陵王」「惠応王」「威恵顕聖王」「金山大王」「万迴虢国公」「趙元
帥」「彭元帥」「潤濟侯」「威濟李侯」「靈派侯」「崔府君」「陸大夫」「杭
州蔣相公」「嵩里相公」「祖將軍」「花卿」「華山之神」「聶家香火」

卷五

「広平呂神翁」「黄陵神」「黄仙師」「江東靈籤」「協濟公」「靈義侯」「張
昭烈」「張七相公」「耿七公」「孫將軍」「張將軍」「順濟王」「横浦龍
君」「道州五龍神」「昭靈侯」「仰山龍神」「黄石公」「石神」「楚雄神
石」「石龜」「鐘神」「馬神」「青蛇神」「金馬碧雞」「金精」「火精」「陳
宝」「黒水將軍」「木居士」「磨嵯神」「黄魔神」「向王」「竹王」「槃瓠」

卷六

「天妃」「蠶女」「青衣神」「白水素女」「馬大仙」「聖母」「温孝通」「孝烈將軍」「靈沢夫人」「順懿夫人」「寨將夫人」「誠敬夫人」「姚娘」「曹娥」「二孝女」
 「五瘟使者」「五盜將軍」「掠刷使」「増福相公」「福祿財門」「門神」「神荼鬱壘」「鍾馗」「司命竈神」「紫姑神」「開路神」「翁仲二神」

明らかに、これは各神格の性格に基づいて分類を行ったものである。

卷一は「玉皇上帝」「西王母」など、天界の最も重要な神々が占めており、卷二は「玄天上帝」や「許真君」など、比較的地位の高い主要な神仙を多く収録する。卷三は、始めの「南無観世音菩薩」から「傅大士」までが仏教系の神々を集めており、「灌口二郎神」から「射木山神」までは、水神や海神や山神など、自然物に関わる神を集める。卷四から五は、生前に功績のあった者が死後神となったものと、有力な地方神、また動物などが神となったものを収録する。卷六の前半は、「天妃」から「二孝女」までが女性の神をもっぱら扱い、後半の「五瘟使者」から「翁仲二神」までは、疫神や財神、また門神や竈神など、一般生活に関わりの深い神々を集めている。

むろん、各項目の性格はそれほど截然と分かれるものではないため、やや分類が不適当と思われるものもあるが、『三教搜神大全』の雑多さに比して、『搜神記大全』の方がより整然と配列されていることは間違いない。

なお、『搜神記大全』においては、各神の生誕日を記しているのがまた大きな特色となっている。

ところで、「宗三舎人」「楊四將軍」の二項目については、項目名だけがあって記事がない。これは『続道蔵』に所収の版本では、目次に項目名が記してあるのみであるが、富春堂の刊本を見るに、両神ともに画像を附し、本文のみが切り取られたように失われている。この部分が何故無くなったかについては分らない。

宗三舎人はまた「鬚三爺」とも呼ばれる神で、水神とされる²⁰⁾。「楊四將軍」は黄芝崗氏が詳しく考証しているように²¹⁾、湖南地方において有名な水神で

あった。また「楊泗菩薩」などとも称される。楊四將軍は、二郎神や許真君と同様に、悪龍を退治して水害を治めたという伝説がある。この神の生誕日は旧暦の六月六日であるが、『搜神記大全』富春堂本ではこの日付をわざわざ記載しながら、記事だけが削り取られるようになっていく。しかし、記事の内容に不都合があったために削除されたようには思えない。おそらく伝本自体の欠損によるものであろう。

ただ万暦年間に編纂された『続道蔵』に所収の『搜神記大全』においても、この項目はやはり項目名だけがあり、記事がない。よって『続道蔵』本は完全にこの富春堂本に拠っていることは明らかである。ただ、『続道蔵』本では、羅懋登の序文については羅の署名を削って採録している。

『搜神記大全』において増補されている項目を見るに、『三教搜神大全』との相違がより鮮明になる。『搜神記大全』では、歴史上の人物が地方神として祀られているものを取り上げる。「西楚霸王」は項羽、「零陵王」は唐閔、「恵応王」は欧陽祐、「金山大王」は霍光、「彭元帥」は彭廷堅のことであり、それぞれ特定の地方で神として祭祀されるものである。楊四將軍も含め、これらの神は現在でも廟が残っているものがある。例えば、上海にある城隍廟は、もとは金山大王・霍光を祭祀したものであった。この廟は明代に城隍廟としての性格を強めていく。また「黄陵神」「江東靈籤」「協濟公」「靈義侯」「張昭烈」「張七相公」「耿七公」「孫將軍」「張將軍」「順濟王」などの神は、いずれも地方色の強いものである。

ただ、こういった地方神を採録することは、そもそも『搜神広記』において行われていた。「威恵顯聖王」「祠山張大帝」「掠刷使」「沿江遊奕神」「常州武烈帝」「揚州五司徒」「蔣莊武帝」「威濟李侯」「杭州蔣相公」「増福相公」「嵩里相公」「靈派侯」などの項目がそうである。そして『搜神記大全』と『三教搜神大全』に共通する項目、すなわち、「九鯉湖仙」「王侍辰」「盧山匡阜先生」「黄仙師」「洋子江三水府」「蕭公」「晏公」などにもそういった傾向が見られる。すなわち『搜神記大全』は『搜神広記』の項目をかなり入れ替えているとはいえ、各項目の採録については、『搜神広記』の地方神重視などの方針を忠実に踏襲していると言えるのである。それに比して『三教搜神大

全』において増補されている項目には、地方神は少ないように思える。それは『神僧伝』などから材料を採取していることから感じられる。『三教搜神大全』の方は、この面では若干作為的なものが目立つ。そういった意味では『三教搜神大全』よりも、『搜神記大全』の方が、元明期の民間信仰の状況をよく反映するものであろう。

注

- 1) 王秋桂・李豊楙編『中国民間信仰資料彙編』第一輯（台湾学生書局・1989年）「提要与総目」1頁。
- 2) 前掲李豊楙『中国民間信仰資料彙編』第一輯「提要与総目」3頁。
- 3) 『絵図三教源流搜神大全（外二種）』（上海古籍出版社・1990年）351頁。
- 4) 原文：元板画像搜神広記前後集、昔在京師殿肆所見者、毛氏汲古閣旧藏、卷首毛氏印記。（略）此書明人以元板画像搜神広記、増益繙刻。即可以書中皇明年号証之。而諸僧記載、悉本永樂御製神僧伝一書、文句都無所改竄。
- 5) 前掲李豊楙『中国民間信仰資料彙編』第一輯「提要与総目」4頁。
- 6) 原文：唐武后光宅二年九月甲寅、追尊聖母曰先天太后。祖殿在亳州太清宫是也。
- 7) 原文：国朝会要曰、天禧元年三月六日、冊上聖祖母尊号曰元天大聖后。先是大中祥符五年、制加上聖祖母号侯、兗州太極觀成、摺日奏上至是、詔王旦等行冊礼。
- 8) 『旧唐書』礼儀志四（中華書局版）926頁。ここでは台湾中央研究院「漢籍電子文献」<http://www.sinica.edu.tw/~tdbproj/handyl/>を利用。
- 9) 原文：三月壬子、親謁玄元宮、聖祖母益寿氏号先天太后。
- 10) 『宋史』礼志七（中華書局版）2542頁。前掲中央研究院「漢籍電子文献」を利用。
- 11) 原文：制九天司命保生天尊号曰聖祖上靈高道九天司命保生天尊大帝、聖祖母号曰元天大聖后。
- 12) 李献璋『媽祖信仰の研究』（泰山文物社・1979年）63～64頁。なお、この引用文においては旧仮名遣いと括弧について、若干の変更を加えている。書名は二重括弧とした。
- 13) 前掲『絵図三教源流搜神大全』328頁。
- 14) 原文：北極驅邪院、左判官唐顔真卿。（略）顔家子孫得書、驚曰、先太師親筆。発塚開棺、已空矣。後白玉蟾云、顔真卿為北極驅邪左判官。
- 15) 『大正新修大藏經』第五十冊 No. 2064『神僧伝』ここでは「漢文電子大藏經系列」

<http://www.buddhist-canon.com/>の電子テキストを利用。

- 16) ここでは影印本『仙仏奇蹤』（江蘇広陵古籍刻印社・1993年）を使用した。
- 17) 雷法については、松本浩一「宋代の雷法」（『社会文化史学』第17号・1979年）45頁参照。
- 18) 道教儀礼中に見える元帥神については、大淵忍爾『中国人の宗教儀礼——仏教・道教・民間信仰——』（福武書店・1983年）247頁、また儺戯については、王秋桂・虞修明『貴州省徳江県穩坪郷黄土村土家族衝寿儺調査報告』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1994年）28頁、また王躍『四川省江北県舒家郷上新村陶宅的漢族「祭財神」儀式』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1993年）81頁などを参照。
- 19) 八仙の人員の異同等については、拙論「『八仙東遊記』における過海故事の変容」（『東方学の新視点』五曜書房・2003年・343～368頁）参照。
- 20) 姚福均『鑄鼎余聞』（『中国民間信仰資料彙編』第一輯所収）410頁。
- 21) 黄芝崗『中国的水神』（上海文芸出版社影印本・1988年）1頁。